



2007年(平成19年)
8月号(No. 747)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

URL ● <http://www.jac.or.jp>

e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

日本山岳会への提言	
百年の登山文化の継承	1
訪問取材	
100歳の川崎精雄さんに聞く	4
東西南北	6
アブルツツ公爵記念国立山岳博物館	
韓国人は書物好き	
追悼 山本朋三郎さんを偲ぶ	7
活動報告	8
図書委員会/資料映像委員会/	
医療委員会/事業委員会/	
有志閑談会	
支部だより	12
秋田/東海	
図書紹介	14
図書受入報告	15
会務報告	16
ルーム日誌	17
会員異動	17
新入会員	17
INFORMATION	18
さんけん通信	19

▶ 日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間
月・火・木 10~20時
水・金 13~20時
第2、第4土曜日 閉室
第1、第3、第5土曜日 10~18時

日本山岳会への提言 百年の登山文化の継承

松田雄一

日本山岳会の創立100周年を記念して『日本山岳会百年史』が編纂された。「本編」と「続編・資料編」からなる大作である。その編集委員長を務めた松田雄一氏に、日本山岳会にとって伝統と文化の継承がいかに重要かを綴ってもらった。

『百年史』の刊行

『百年史』の編集を通じ、強く感じたことを今後の会への提言としてまとめてみた。まず、本会の歴史や登山の記録、会の文化遺産というべき絵画、映像記録、写真、地図、登山道具等の資料、重要な行事の記録が必ずしも充分に保存・継承されていないように見受けられた。

『百年史』の編集にあたり、これ

らの点については、山岳会の縦の歴史と称して、項目別に調査してみた。これは、本会の百年の歴史を客観的に見るためにも必要であり、重要な事項が掲載もれになることを恐れたからでもあった。

会の歴史の基礎調査は、創刊以来連綿として続いている『山岳』および昭和5年に月報として発行

されることになった「会報」(のち『山』に名称を変更)を調査することから進められた。

その結果、関東大震災や、第二次大戦終戦前後の一時期は、休刊せざるを得ない事情があったとしても、時の担当理事の都合によつて、やむなく合併号で済まされた経緯もみられた。そのうえ、時の担当理事や編集担当者の都合により、会務報告(理事会の議事録等)に、かなりの温度差も見られた。ある年代は、会報『山』にも掲載がなく、会の記録がまったく見当たらないものもあった。

望月達夫、織内信彦先輩などからは、この点について、問題点の核心にふれ、次のような指摘を受けたことを覚えている。

「本会では、保管を必要とする重

要な会務の記録や文書(アーカイブと称される書簡等の古文書を含む)の保管管理業務が、担当理事の交替する際にも、引継ぎが行なわれておらず、事情が分からぬまま廃棄処分されたり、持ち出されたまま、返却されないものもありうる。そこで、保存を要すると思われる本会の記録は、最低限「会報」には活字にして残しておくように」とのアドバイスを受けていた。

以下に、項目をあげて説明したい。

図書・地図等の保存

本会の図書室は、山岳専門図書館として、貴重な資産を受け継いでいる。基本的には、図書を愛していた諸先輩からの、寄贈になる

もので、磯野文庫、望月文庫、神谷文庫、山崎文庫など故人の文庫名を残しているもののほか、横、

松方、藤島、田辺(主計)、成瀬、島田、岩永など多くの先輩の寄贈によるものや、松崎中正会員から百周年を記念して寄贈されたシュラギントワイトのアトラス、外国の山岳会図書室との交換図書によるもの、外国人の篤志家ハリシユ・カパディア名誉会員や、ドイツのウォルフガング・ハイヘル氏などからの寄贈によるもののほか、図書研究出版基金で一括購入したものもあった。

一方、新刊本については、原則として、出版社、大学山岳部、山岳会ならびに会員の著者からの寄贈により、現在は約1万5000冊に達する貴重な蔵書が保管されている。

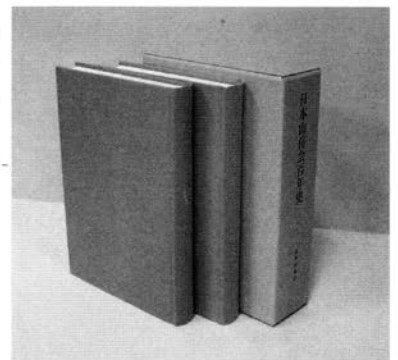
この図書の管理は、図書管理委員会と、専任司書の田村典子氏とで管理していた。ところが最近、田村司書が100周年記念募金事務の応援などに長期間出向していたために、受け入れ業務は行なうものの、図書収納スペースがなくなっても整理が追いつかないという状況である。本業の会員に対する

るサービス業務にも対応できず、地図の整理も滞っていた。

一方、図書委員会も文化活動の一環として「山岳史懇談会」「山岳図書を語る夕べ」など多彩な文化活動を展開している。

地図についても、当該地図を受け入れた時点では分かっているとしても、その受け入れた担当者が替わってしまうと、分からなくなってしまう場合もありうる。一例をあげると、明治20年代にウォルター・ウエストンが利用していた頃の英文の二十万分の一地形図や地質図が無造作に新聞紙などに包まれて残っていた。誰が、いつ、寄贈されたかという記録はどこにもなく、よく捨てられずに残っていたものだと思っていた。

幸いこの地図は、地図に詳しい児玉会員が整理して、「日本山岳会所蔵の地図類について」と題して『山』に連続して掲載された。これが地図探検家の三浦裕一氏の目に留まり、財団法人日本地図センターの『地図ニュース』1991年11月号の「ニュース欄」に「登山家は地図メーカー?」のサブ・タイトルをつけて掲載されたので、独立行政法人産業技術総合研究所



山岳会の歴史をまとめた『日本山岳会百年史』

地質調査情報部の目にとまり、本会に対しこの地図についての閲覧の要望が届いた。

その結果、この地図は、同研究所が再編前の地質調査所の前身、農商務省地質調査所の時代(約15年前)に、作成した地図であり、同研究所で国内の所蔵機関などを永年にわたり捜していたこともわかり、この地図の存在が脚光を浴びることになった。その後、しばらくして同研究所から、日本山岳会で所蔵しているものは保存状態がきわめてよいので、ぜひ、借用して、歴史的貴重書として電子ファイル化して保存したい旨の要望があった。本会ではこの地図の作成元からの要望でもあるので、これに応えることにし、本会の理事会にはかり、電子化されたCD、

ROM版のコピーの提供を条件に応諾し感謝されることになった。

登山文化継承のための人材養成

本会は登山者による団体であるから、登山を实践することは当然である。しかし一方では、会員の高齢化にともなう登山の文化活動も盛んになりつつある。その活動は単なる仲良しクラブではなく、100年の歴史と伝統を生かしたものであつてほしい。日本山岳会の多彩な人材で、ほかの山岳会には見られない、ひと味違う山岳会としての文化活動、それぞれの分野でレベルの高い活動を期待したい。

その意味でも、理事会の前向きな積極性が望まれる。この際、英国山岳会のように、経験のある会員により、若手の会員にこれらの経験や知識を継承していけるような運営はできないものだろうか。ちなみに英国山岳会では、各担当委員会の委員長とは別に、文化遺産管理のための態勢をいっている。その態勢をあげてみよう。

Librarian Emeritus ≡ 名誉図書館長。この下にHonorary Librarian がある。



日本山岳会の伝統を育む、第1回有志閑談会

Honorary Archivist ≡ 名誉記録
公(古) 文書管理者

Honorary Keeper of The Club's
Pictures ≡ 絵画・写真保管者

Honorary Keeper of The Club's
Artefacts ≡ 彫刻・彫金記念品保管
者

Honorary Keeper of The Club's
Monuments ≡ 記念碑の担当者

英国山岳会では、これらの要職
には、正・副会長など三役経験者
や学識経験者として長老を起用し、
後進の指導に当たっている。

日本山岳会としても、登山の文
化遺産の管理には、このくらいの
重点をおいてもよいのではなかろ
うか。

資料の保存と整理

資料委員会は、将来の山岳博物
館のための資料収集を目標に発足
した委員会である。発足当時、寄
贈された資料に関しては、必ず会
報に受け入れの経緯などを含めて
報告し、あわせて台帳に登録して
いた。よって、保管状況は常に確
認することができた。ところが、
最近では資料数も増え、本会内の
保管場所の移動も頻繁に行なわれ
ていた。そのため、絵画について
は総会で報告したリストの在庫管
理も難しくなっている。フィルム・
ライドなどの保管や貸し出しにも
不便をきたしている現状である。

一方、貴重な写真や資料の劣化
を防ぐためのデジタル化(スペー
スの節約、未来へ向けてのデータ
化にもつながる)、膨大な資料関係
の適切な保存場所の確保など、こ
れら貴重な文化的資料の保存・継
承のためには、理事会としても重
点的に予算の計上が望ましい。

編集者に期待すること

『山岳』会報『山』とも、その編
集は定款に基づく編集長の方針で
進めることは当然である。したが

って、会員のニーズに応えるため
の情報の提供、開かれた会として
会員個人の発言の場の提供ととも
に、会としての記録を残すことだ
けは忘れないでほしい。

『山』に掲載されているものを、
再度『山岳』に載せることは必要
ないという意見もあるが、重要な
原稿はあえて『山岳』にも載せる
べきである。昭和50年の一時期、
会務報告が省略されたことがあつ
た。さらに、本会100年の歴史
の中で、昭和32年だけは、総会報
告も決算報告もどこにも記録がな
い。『百年史』編集にあたり、どれ
だけ苦労したか計りしれない。

おわりに

『山』5月(744)号に、『百年
史』を編集する上で、苦労した話
を書いた。登山界そのものが成熟
期に入り、従来の取り組みでは将
来が展望できなくなっていたため
であった。

そのため、平山善吉前会長は、
とりわけ苦勞をして会を運営した。
そして将来を見据えていくつかの
改革案を掲げ、常に理事会でその
方針を提示してきた。

本年度の通常総会では、平山前

会長から、「自分の任期中にやり残
した問題は、次期宮下会長に、引
継ぎ書でお願いしておいたのでよ
ろしく」との挨拶があったと記憶
している。聞くところによれば、
この引継ぎ書は、前担当理事から
提出された引継ぎ事項をまとめた
ものだという。最後の理事会で承
認を得たうえで発表したそうだ。
総会の直後には、理事会の引継ぎ
のため、新旧理事出席のもと、公
式に引継がれているとのことであ
る。

しかし現実には、理事と委員長
との関係は、昨年度とまったく変
わってしまつて戸惑っているとい
う声も聞く。これでは、せっかく
進めてきた業務改善計画などは承
認されていないことになる。今後、
担当者の引継ぎ事項は、監事立会
いのもとでも、双方で充分に話
し合つて、合意の上でなされるべ
きではなからうか。

日本山岳会100年の歴史は、
まさに山岳会の文化の伝承にある
と思う。これでは、会の伝統や文
化遺産、継承なども途絶えてしま
うのではないかと危惧する。あえ
て提言申し上げる次第である。

訪問取材

100歳の川崎精雄さんに聞く

資料映像委員会 奈良千佐子

川崎精雄さんから、未開の山、藪山を連想する人は多いだろう。特に、上越や南会津の山に残した足跡は大きい。資料映像委員会ではその川崎さんを訪ね、古きよき時代の山の話を伺った。山行の詳細については、著書などから知ることができ。ここでは、100歳を迎えた今、自らが語った心に残る登山秘話を中心にまとめてみた。

俗化する山から未開の山へ

バスが通じた上高地は、もう急激に俗化するだろう。ならば未開の登路と山を求めて。そう考えた時、ふと頭をよぎったのは上越から南会津だった。

その南会津に初めて入ったのは1929(昭和4)年10月のこと。水上から藤原、そして尾瀬へと入った瞬間、そこには僕の魂を奪うような桃源郷が広がっていた。

その瞬間「こっちの方がおもしろい」、僕は確信した。

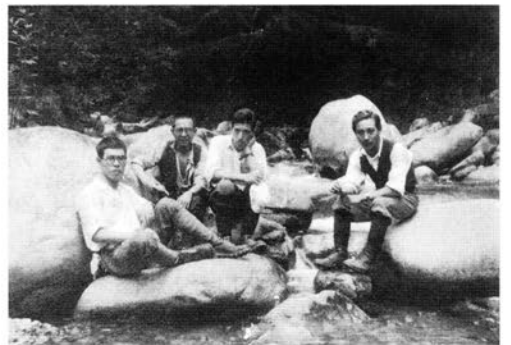
荒沢岳、悪戦苦闘

秩父の山を単独で歩いていたら、東京登山会の人に会った。その後、見せてもらった写真から荒沢岳を知り、惹きつけられた。これはすごい、どうしても登らなければと

思った。今の荒沢岳は上部を少し削った感じだが、あの頃はもっとピツと立っていたんだ。

1930(昭和5)年秋、荒沢岳に登るため、まず偵察に向かった。上越線の開通に向けて工事中だったから、資材を運ぶためのトロッコがあった。工事現場の所長に「トロッコに乗せてほしい」と頼んだら、ジロツと見て、「どこから来た」と聞いてきた。東京と言うべきか土合と言うべきか迷ったが「東京から来た」と答えると、「そうか、東京か」と、ニッコリ笑って乗せてくれた。もし「土合から来た」と答えれば、工事の飯場から逃げてきたと思われ連れ戻されただろうと、後で聞いた。

銀山平から見た荒沢岳は、なか



中央大学山岳部夏期山行、鳥川から常念へ(右が川崎さん)。1929(昭和3)年7月、鳥川にて

なか手ごわく思えた。当然、道はなく、中荒沢と蛇子沢の間の尾根を攻めるしかないと考えた。

1931(昭和6)年8月、ついに越後三山から荒沢岳を目指した。9月になれば清水トンネルが開通するのだが、せっかちな僕はそれまで待てない。高崎駅から早朝、砂利を運ぶ試運転中の貨車に乗せてもらい、清水トンネルを抜けた。そして、前年偵察で利用したトロッコ跡をたどり、湯沢に出て汽車に乗り換え、六日町で下車。明媚な風景を楽しんだり、突然の夕立でびしょぬれになったりして、やっと清水瀬にたどり着いた。あの頃は、苦心しながら山に入る、

それが普通だった。そこから中ノ岳、越後駒を越え、やっと銀山平に着いた。その銀山平では、激しい雨が3日間続いた。

東京を出てから10日目、やっと天気が回復。朝5時に出発、念願の荒沢岳を目指した。雨のたびに荒れるという沢越え、さらに藪こぎの連続で悪戦苦闘。念願の頂上に立ったのは2時過ぎだった。尖った頂上は2、3人がやっと立てる程のスペースしかない。その頂上で、灰ノ又山へ続く尾根に誘惑されそうになったが、宿の主人の心配そうな顔を思い帰路を急ぐ。再び悪戦苦闘、クロベ沢の出合に戻った頃はまっ暗。ランタンを灯し、沢をボシヤボシヤと歩いていたら、誰か懐中電灯を振っている。宿の主人だった。結局、戻ったのは夜9時、16時間を要したことになる。

荒海山、忘れえぬおもしろい話

戦後、東京では外米を食べていた時期があった。その頃、南会津の山に行くにつけ、食料事情はどうだろうかと考えた。地図を見ると、米がとれるような気もするし、山ばかりのような気もする。そこで、東京から外米を持ってい



100歳の川崎精雄さん、現在も元気に山を語る

くことにした。上野発の夜行列車に乗り、若松に出て、会津線で田島に向かった。終戦後だったから、電車の中には生き生きとした兵隊さんがたくさんいた。終点の田島駅には、翌朝9時頃到着。駅に着いてヒョッと見たら、大きな塩鮭が店の外に放り出している、その隣では床屋が店の外でバリカンをやっている。僕は、そのすこぶる平和的で明るいこの町が気に入った。

ここでバスに乗り、終点の滝ノ原へ。車窓からは七ヶ岳の岩峰や、目指す荒海山の雄姿が望まれた。終点で、「どこか泊めてくれる家はないか」と聞くと、「この先の山の麓に小島さんという一家が住んで

いるから、そこへ行って頼むといい」と言われた。僕は、泊まる所ができてウキウキ。小島さんの家に着いたのは夕方だった。

腹が減っていた僕は、東京から持参したボロボロの外米を食べようと思っただけ。それを主人が見て、「何だ、それは」「東京ではこれ食べているんだ」「おーい、みんな来て見ろっ！東京ではこういうもの食べてんだっ。小島さ

んの家族みんなが寄ってきて、ジロジロと見せ物を見るように笑っているから、もう食べられない。そのうち、飼犬を連れてきて、「それ、犬に食わせろっ！」と言う。ところが犬は、(ふん！こんなもの食えるかっ！) って顔を

して、口もつけずにどこかに行ってしまった。東京では、米がなくて大変なのに、山の中は逆だった。あれは、ほんとにおもしろかった。もうその後は、みんなで大笑い。これが僕の南会津への第一歩。忘れられないおもしろい話。

そして僕にとって、この荒海山は生涯で一番好きな山になった。

日本山岳会入会と5円を天秤にかけた頃、そして今思ふこと

1929 (昭和4) 年、丹沢縦

走を一緒にした黒田さん(日本山岳会会員、後に戦病死)が、日本山岳会入会推薦の紙を書いてくれた。でも僕は、銀行に入ったばかりで薄給、会費の5円は大きな問題だった。5円あると、中央や奥多摩で3〜4日の旅ができる。1泊1円が相場の時代だったから。それで、推薦の紙はもらったけれど、出さなかった。僕は、天秤にかけて5円を選んだ。

時が経ち、推薦してくれた黒田さんに悪いと思って、御茶ノ水の山岳会事務所に申し込みに行った。そしたら女の事務員の方が、「これを書いてください」って。「何を書くんか」と聞くと、「どこの山に行ったか書いてください」と。僕は、「山はたくさん行っているから書ききれないからダメだ」と言っ

て、そのまま帰ってきた。日本山岳会には、1947 (昭和22) 年6月にやっと入会(会員番号3043)した。

100歳になった今、しみじみ思う。僕が山から得たものは健康。今の人に何か言葉をかけるとしたら、それは、行きたい山は自分で探し計画すること。山に対して自然体で謙虚に接してほしい

ということだ。

【平成19年6月21日、杉並区の自宅で行ったインタビューを元に編集(中央大学OBの玉誠氏にインタビュー)としてご尽力をいただきました。】

■川崎精雄 かわさき・まさお

1907年神奈川県に生まれる。中央大学山岳部OB。在学中から北アルプス、上信越の山、会津の山を登る。著書に『雪山・蘆山』『山を見る日』などがある。日本山岳会名誉会員。

中国チベット〜ネパール
青蔵鉄道走破とチョモランマベースから
ヒマラヤ越え12日間 10/2 発 ¥458,000

西寧からラサへ1956km、さらに1000km チョモランマ
ベースキャンプ経由、カトマンズまで抜ける大縦断の旅

Wec 株式会社ウェック・トレック
国土交通大臣登録旅行業1662号/日本旅行業協会正会員

〒105-0003 東京都港区西新橋3-24-8 山内ビル4階
電話 03-3437-8848 E-MAIL info@everest.co.jp

東西南北

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

アブルツツイ公爵記念 国立山岳博物館

松澤節夫

山岳博物館(イタリア山岳会トリノ支部所属)は、トリノ市の南端、ポー川の右岸の丘の上にあり、1874年に、修道院の建物の一部にイタリア山岳会がアルプスの展望台を設置したことに始まった。故フォスコ・マラーニ氏や杉

本誠氏の尽力、トリノ在住のミヤハラ・ミツオ氏の協力で、同館の「ウェストン写真コレクション」の日本での展示(『山岳91号/1996』掲載)や、岩橋崇至氏、水越武氏らが招待されて写真展を開催するなど、日本山岳会との因縁は深い。

当館は、イタリア語だけでなく、英、仏、独語版の案内書を発行し

ているが、今般、日本語版も発行した(48ページ、小B6判)。カラー刷りの表紙は、モン・ブラン(モンテ・ピアンコ)を背景に、女性が懐中電灯を照らしながら山路を下る1930年代のポスターで飾られている。建物内外の様子や歴史的な展示をカラー写真で紹介していて、訳文も読みやすく親切な作りだ(大森久雄氏らの翻訳・編集)。日本人にも来館してもらおうというアルド・アウディージオ館長の熱意がこめられている。

常設展示は、岩壁に彫られた原始的な彫刻から山の民俗学、宗教的な品々、アルプス開拓時代、アブルツツイ公爵の19世紀の冒険的な北極探検、K2初登頂をはじめとする近代登山、スキー、ヴィットリオ・セツラ作品など多岐にわたっていて、われわれ登山愛好家には興味が尽きない。また、フィルム・ビデオ・ライブラリーも世



MUSEO NAZIONALE DELLA MONTAGNA
表紙は、1930年代のポスター。モン・ブランを背景に、「懐中電灯」を照らす女性の姿

界屈指の充実ぶりとのこと。文書資料を含む世界の山岳図書のコレクションは膨大で、圧倒される(日本の山岳書も収蔵されている)。

ミラノへは多くの日本人が訪れるが、ミラノ空港から直通高速バスでわずか1時間ほどの美しい山岳都市トリノまで足をのばす人は少ないらしい。1日を、山岳博物館を見学して、展望テラスからアルプス連山のパノラマを楽しみ、中世の雰囲気の色濃く残したトリノ市街を見下ろしながら、博物館付属のレストラン・カフェでカプチーノ(私なら冷えた白ワイン!)を味わっていただきたい。

なお、トリノから西へ30キロ、閑静なスーザ渓谷の入り口、エグジルの村にある一二世紀に建設された要塞の中に、分館が開設されている。皆の見物と随時開催される音楽会や芝居見物がてら、ピクニック気分で訪ねたい。

韓国人は書物好き

孫慶錫

『会報』5月(744)号に書かれた「韓国の山と書物」を読んで、いささか困惑しております。「東西南北」は会員のエッセイで、私は最初に読むコラムでもあります。

そこで鈴木正規さんはソウルに來られて山に登り、また山岳書を探されたのですが、本屋探しをするのに大変苦労された様子が書かれています。「韓国人の読書に関心が薄いようだ」ときめつけられていたのにはびっくりしました。

ソウルには東京の神保町みたいに古本屋が町並みを連ねてはいませんが、中心街の光化門、鍾路、乙支路、仁寺洞、南ソウルの江南には、東京の大型書店並みの代表的な書店だけでも7軒あります。

なかには、高層ビルの地下から3階に至るまで数十万冊の新刊および洋書、日本書などを売っている大型店もあります。

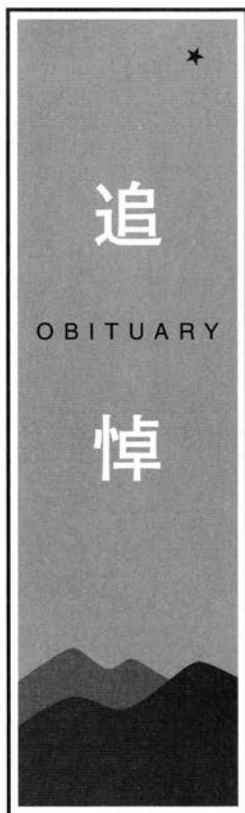
また街の屋台露天にも本屋さんや数百とあります。ここでは山の

月刊誌「山」「人と山」「マウンテン」の3雑誌は必ずおいてあります。また山岳書だけを取り扱っている専門書店も3軒あり、『アルパイン・ジャーナル』とか『ヒマラヤン・ジャーナル』なども展示販売されており、入手も難しくありません。古書(純漢文古書)専門店も数十軒あります。すべてのデパートや大型スーパーにも本屋さんには必ずあります。

また、ソウルでは現在、「リビングルームを書斎に改造」のキャンペーンを続けていて、各家庭では「子どもに本を」という掛け声がかけられています。「部屋に本がないのは体に精神が抜けているのと同様だ」という韓国の古い諺は、韓国人共通の生活文化であります。

鈴木さんは本屋探しに大変苦労されたようですが、本屋のない街だけを行かれたのではないかと心配です。せっかくソウルへ来られて望みがかなえられなかったこと、私も残念でなりません。

もし次回、来られる機会がありましたら、私が案内いたしましょう。



山本朋三郎さんを偲ぶ

鎌坂青

私が、朋三郎先輩と親しくさせていただくようになったのは、1993(平成5)年、立教大学チヨモロンゾ峰(7816m)登山隊で、中国側ルートより初挑戦の隊長を務めたのがきっかけである。それまでは気安く話しかけることなど畏れ多い、雲の上の大先輩であった。

中国登山協会との交渉の際、团长として北京へ同行、議定書に署名をしていた。また、73歳の高齢ながら偵察隊長を引き受け



山本朋三郎 (やまもと・ともさぶろう)

2007年5月16日病死(享年86)

1920年6月、静岡生まれ。

1949年、日本山岳会入会。

1966年～87年、静岡支部長を務める。

1957年、第12回静岡国体実行委員長を務める。

1958年、もみじ会設立。

日本山岳会名誉会員。

てくださり、若手隊員2名と共に本隊を登頂成功へと導いてくれた。頑固者で、「俺の前では直立不動で敬礼しろ」と、軍隊式の厳しい一面も持ち合わせていたようである。

カンシユン氷河のBCで2週間を過ごした時、「インスタント・ラーメンばかり食べさせられて! 高い金を払ったのにとんでもない」との中国批判をされたこともあった。

日本山岳会では永年会員、名誉会員であり、静岡支部長も長年務められた。

1957(昭和32)年、静岡国体の登山競技では実行委員長として、静岡県側からの「南アルプス」を広く紹介した。1958(昭和33)年には、「鹿肉を喰う会」のちの「もみじ会」を立ち上げた。「もみじ会」には日高、藤島、松方各氏をはじめとする重鎮も顔を見せ、多くの岳人たちに喜ばれながら30回も続けられた。

長年務めた静岡支部長を辞めてからは、気の向くままネパールに足を運び、ヒマラヤの山々をスケッチしていたようだ。毎年、いただいた山の絵の年賀状は、私の宝物である。

日本山岳会、立教山友会の大先輩として、「正しく楽しいクラブライフ」の精神を、身をもって示し、教えてくれた偉大なる「岳人」であった。

自ら動き回る激しい性格の反面、私たちへの電話では、「おいでる!」と静岡弁で冗談を交えながらの語りかけも、今は懐かしい思い出となっていました。

ご冥福をお祈り申し上げます。



活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

図書委員会

第16回山を語る「すべては山から始まった―穂高から熱帯雨林へ」

5月15日、水越武氏による講演「すべては山から始まった―穂高から熱帯雨林へ」を開催。水越氏は次のように語った。

人と遊ぶよりも自然の中で一人、動植物を相手としていた方が好きだった私が、山の洗礼を受けたのは小学校の高学年でした。山の世界を知ること、標高3000メートルという特別な環境の、それまで目にしたこともない珍しい花や虫への関心が一気に高まりました。

学生時代の休暇はほとんど山で過ごし、家に帰っても山行記録や山の本を寝るのも惜しんで読みふけたことを思い出します。大学を中退し、映画制作のプロダクションなどにも在籍しましたが、27

歳という年齢で写真の世界に入りました。田淵行男先生の『高山蝶』との出会いも大きな刺激となりましたが、山と仕事を結びつけ、心ゆくまで山に登り、山の中で生活をしたという望みも強かったように思います。

写真を始めからは信州から北海道へと移り住みましたが、常に山から離れることなく田舎で生活し、都会に出て写真による作家活動をするなどと考えたことは一度もありませんでした。これから自然の中に身を置くことによって、自然に対する五感を常に研ぎ澄ましていたいと思っています。

今年は私が最初のテーマである穂高岳の撮影を始めてからちょうど40年となります。国内外の仕事を手掛け、自然をテーマとし、人のあまり訪れていない高山や辺境の地を歩いてきました。一つのテーマに10年、20年と納得のいくま

で追いかけて、写真集としてまとめるというやり方で進めてきました。いつの間にか著書が20冊を越え、自分でも驚いています。

最初の仕事はモノクロームで、35ミリのカメラで追いかけた「穂高」です。彩り豊かな現実の世界を、色彩を削ぎ落とし、白と黒の世界で表現するモノクロームの写真に私はこだわりがありました。

年間200日も入山し、テントや雪洞で暮らして、自分の理想とする写真が一枚でもできたら命と代えてもよいと、真剣に考えていました。山をどれだけ自分の世界に引き込むかが勝負であるにちがいないと考え、シーズンオフの淋しい穂高で、1カ月も下山しなかったこともありました。

純粹に山にだけ向いていた視線も、山の厳しい環境の中で暮らす生きものにも興味を持ち、目を向けるようになりました。厳しい条件の中で生きるものとして『ライチョウの生態』や、『森林限界』の木々を写真集にまとめました。今振り返ると、当時の自分の生き方と重ねて、これらの生きものを見ていたように思います。『日本の原生林』は列島を何度も縦断し、10

年かけました。山の奥まで森林の伐採が進み、わずかに残されていた原生林に注目しました。彼らはわれわれが作り出した厳しい社会環境に立たされていると考えたからです。

海外の山や森林を歩き、日本列島の自然の豊かな美しい姿をだんだんと意識するようになりました。自然の中で積み重ねてきた経験、知識、気力、体力など自分の持っているものすべてを出し切って、真剣に日本列島の自然と対してみたいと考えるようになりました。生態系から見た日本列島の自然を、『森林列島』としてまとめました。この写真集が土門拳賞の対象となりました。

最近、私は自然環境問題と深く関わるようになってきました。現在進めている「赤道の水河」は、好きな山の世界と自然環境問題とを私なりに結びつけたテーマです。自然との邂逅は早すぎたほどでしたが、写真を始めたのは少々遅かったように思います。しかし写真は私の好奇心のおもむくまま、夢や憧れの地に足向けられることを可能にしてくれました。40年間写真をやってきて、今、私は写真と

の出会いが自分にとって幸運の出会いであったと考えられるようになりまし。

最後に私の今後の予定ですが、長年追いつけてきた「私の山の博物誌」を完成させることです。私のライフワークともいえるこの仕事は最後まで丁寧に、行き届いた本にしたいと考えています。新たにスタートさせる撮影としては「溪谷」を考えています。わが国の山の森林と、美しい水の存在は大きな特徴です。それが「溪谷」に集約されているように私には思われます。
(松澤節夫)

資料映像委員会

甦った記録映画『白き氷河の果てに』を上映

資料映像委員会では、映像の持つ記録性と資料性をアピールするため、所蔵している山岳映画（アーカイブ作品）を公開することにしました。6月22日、長編記録映画『白き氷河の果てに』（北斗映画、門田龍太郎監督）を、本会104号室で上映、30年前の海外遠征に思いを馳せた。

作品は、1977年8月、世界

第2の高峰K2の登頂に成功した「日本K2登山隊」（日本山岳協会派遣、吉沢一郎総指揮、新貝勲隊長）の活動をカメラに収めたもので、とくに山男たちの人間ドラマを描いた作品として評判を集めた。当時、文部省特選にもなり、全国ロードショー劇場で公開された山岳映画の名作である。

カメラは、インダス河の激流から始まる。500人余の大キャパバン。激流の渡河、氷河を経てベイスキャンプや前進キャンプの設営などを的確にとらえていく。そして氷雪の岩峰群に挑む登山隊員の活躍、やがて頂上へアタックする隊員の姿。自然と人間との触れあい、静と動とを巧みに描きながら登攀者の生きざまを切り取っている。

記録映画は、時代を語り、また未来に伝える偉大な文化的遺産であることを痛感させる。作品は、35ミリフィルムで撮影したものをDVD化して上映した。30年前の作品とは思えないほど鮮明な映像は、内容とともに参加者一同を感動させ、涙をも誘った。

今秋、アーカイブスに相応しい貴重な作品を上映予定である。ぜひ

ひご参加いただきたい。

故・橋本龍太郎氏の「秘蔵のカメラ」寄贈

06年7月1日、享年70で逝去された元内閣総理大臣で当会会員でもあった橋本龍太郎氏秘蔵のカメラが、長男・龍氏から寄贈された。龍太郎氏はカメラ好きの総理として知られていた。寄贈されたのは、龍太郎氏が愛用していたツァイス・イコンタほか、コンパクト・カメラ（オリンパス・ミュー）である。イコンタ（セミ判）は、もともと龍太郎氏の父・龍吾氏（元衆議院議員）が愛用していたカメラで、後に龍太郎氏が譲り受けたものだという。戦前より製造されているドイツの名機で、50年代のものと思われる。

資料映像委員会では先のカメラ



寄贈されたカメラ「ツァイス・イコンタ」

を受理し、保存することとした。
(羽田栄治)

医療委員会

第27回日本登山医学会開催

日本登山医学会主催の2007年度学術集会「第27回日本登山医学シンポジウム」は6月2日〜3日に、内藤広郎会長のもと、宮城県宮城蔵王ロイヤルホテルで開催され、盛会のうちに終えた。当山岳会の後援に感謝します。

本学術集会は「日本登山医学シンポジウム」の名の下に、第1回の1981年から日本登山医学研究会（現、日本登山医学会）が年次集会として主宰してきた。研究会設立には日本山岳会医療委員会のメンバーが大きく寄与し、シンポジウム開催を支援してきたという経緯がある。

次回、第28回日本登山医学シンポジウムは高櫻英輔会長のもと、08年5月31日〜6月1日に、富山県宇奈月国際会館にて開催される予定である。
(堀井昌子)

特別講演では、宗教民俗学者鈴木岩弓氏が「山と神」について講

演し、山を死霊の場と異郷の神の場として分析し、山の「異界性」を明らかにした。さらに、大阿闍梨である塩沼亮潤氏は「大峯千日回峰行―修験道の荒行―」の様子を語った。回峰行は、毎年5月から9月までの連続する120日間に、48⁺の山道を9年間にわたって往復する修行であり、淡々とした口調の中に自然や自己との闘いの凄まじさが窺われ、印象深かった。

教育講演は蛇研究の本邦第一人者である鳥羽通久氏による「日本の蛇咬症」で、マムシやヤマカガシなどによる蛇咬症の現況とともに手当てを解説した。

シンポジウム「中高年の継続的登山習慣の意義」では、登山が精神と身体に及ぼすポジティブな効果と実態に基づいた安全への提言が、藤本敏彦氏、大森薫雄氏、高山守正氏などによってなされた。大野秀樹氏による、登山を恋愛にたとえた基調講演は、学問的背景をふまえながらオリジナリティな発想が展開されていて興味深かった。

シンポジウム「登山と栄養を再び考える」では、基調講演で柴田近氏が、キムチに含まれるカプサイシンに食事摂取による排便を誘

発させる効果があり、登山時のストレスを軽減させる可能性があることを報告した。さらに三浦豪太氏、天野和明氏、上小牧憲寛氏などによって高所での経験に基づいた栄養摂取と工夫、さらに抗酸化サプリメント摂取の意義、および動物実験の結果が報告された。

ランチョンセミナーは山本正嘉氏による「スポーツ栄養から見た登山中の水分補給と栄養補給―アミノ酸サプリメント(BCAA)の意義にもふれて―」であった。氏は登山では体力強化や歩行技術の習得に加えてアミノ酸摂取のような栄養面での配慮が必要であることを示した。

一般演題は28題が発表された。テーマは雪洞での体温変化、登山前の水分摂取、富士山頂での順応、低酸素室トレーニング、登山やクライミングによる運動器系障害、山での事故遭難調査、登山者検診、有病者登山、低酸素環境下での生理的反応などだった。神戸市立中央市民病院の佐藤慎一氏は、六甲山で遭難し24日後に救出された一例について報告し、里山遭難の死因に凍死が少なくない可能性を指摘し、アルミシートの携行を推奨

した。

功労賞は、1974年に日本女子マナスル登山隊長を務めた黒石恒氏に授与された。奨励賞は昨年「富士山頂での酸素濃度器使用経験」を発表した斎藤繁氏に授与された。(野口いづみ)

事業委員会

「佐渡花の山旅」金北山縦走

5月25・27日、「佐渡花の山旅」金北山縦走に参加した。佐渡は、両津港からタクシーでアオネバ登山口へ。

谷沿いの道は豊かな植物相を示している。チャルメルソウ、ユキザサ、チゴユリ、ムシカリ、ミヤマシキミ、ヒトリシズカ、フッキソウなど白く小さな花が多い。その中でスマイレイワカガミが鮮やかだ。花に夢中になっていると、小雨が降りだし風も出てきた。だんだん強くなりそうなのでドンデン池と尻立山を省略し、ドンデン山荘へ。風は夜通し唸っていた。26日、晴れあがった気持ちのよい朝を迎えたが、出発する頃はすっかりガスってしまった。西風も強い。昨日、登りついたアオネバ



参加者による集合写真

十字路まで戻り、マトネへ登ると稜線は南に向きを変える。西風がさらに強くなった。石花越や真砂の峰辺りは特に強い。真砂の峰を過ぎ、稜線の東側にあるイモリ池で昼食とした。花はザゼンソウ、シラネアオイなどが時折見られた。鏡池、アヤマ池を通り過ぎ、金北山の最後の登りにかかる直前、一瞬だけがガスが切れて、下界を見下ろすことができた。金北山頂上(1172^ト)では、神社の階段に並んで記念写真を撮る。風が冷たいので早々と下山。白雲台まで防衛庁管理道路という砂利の車道である。白雲台からは専用バスで宿に向かった。

27日、晴れ。タクシーで大野亀に向かう。大野亀には一面トビシマカンゾウが咲いていると思いきや、まだちよつと早かった。とりあえず頂上に登り、三角点をなでてから、記念写真。ここからは、遊歩道を5分歩いてはじき野フィールドパークへ向かった。浜辺にはハマナスの群生があった。豪勢な海鮮料理の後、両津港へ向かい解散。

ひと言でいえば、春の花にはちよつと遅く、夏の花にはちよつと早いという印象の「佐渡花の山旅」であった。

(荒木正弘)

有志閑談会

「とうふや・うかい」に集う

6月9日、東京・芝にある日本庭園の美しい「とうふや・うかい」にて、第49回有志閑談会が開催された。夕方から雷雨という予報にもかかわらず、出席者は33人、豆腐懷石を堪能しつつ閑談した。

この有志閑談会の開催までに、世話役は大変な苦勞をした。

第46回から3年にわたって世話役を務め、昨年10月に亡くなった小倉厚さんは病のなか前任者の三

上智津子さんに世話役の後継者を探すよう依頼、三上さんは数人に打診し、ようやく芳野越夫さんの承諾を得た。さっそく2人で病中の小倉さん宅を訪問、新世話役が決まった報告と引き継ぎを行ない、小倉さんを安心させた。亡くなるちようど2カ月前のことであった。

このような経緯があつて、宴は世話役現役のままで亡くなられた故・小倉厚さんへの黙祷が始まり、宮下秀樹新会長の挨拶、山田二郎名誉会員の音頭で乾杯。初参加の田部井淳子会員の挨拶と続き、料理を堪能しつつしばし閑談。

今回、世話役が配布したメンバー近況報告に山本朋三郎名誉会員



49回目を迎えた伝統の有志閑談会

からの「先月二週間の手術後の入院、出たら救急車で逆行、今度はいつ退院か判らない」とのメッセージが載っていた。返信ハガキに判読しにくい鉛筆書きで記されていたとのこと。この返信が山岳会への絶筆となった。

しばらく閑談の後、夫妻で年に何回も海外の山旅を楽しんでいる中村純二さんから「旅には他律的なツアーや集団登山もあるが、お勧めしたいのは全く自由で達成感もある自主的な山旅だ。そのためには、山の實力を身につけた親しい少人数パーティが充分な時間的余裕を持ち、ガイドは雇わず山小屋やコースは自身で決めることである。厳しくても静かな自然は世界のどこにでもあるので、必ず驚きや感動が得られる筈である」と示唆に富む講話があり、ついで西丸震哉さんの「アウシユビツを見学した話」があつた。

その後も、しばし料理と閑談を楽しみ、締めめの談話は松田雄一名誉会員の「百年史について」で、冒頭に本編の209ページ「有志閑談会の推移」の表のうち第34回から第42回まで9年間の会場が後樂園涵徳亭であるべきを、大隈公園完

之荘と誤って記載されていること、第20回から第32回までも大隈公園ではなく大隈会館完之荘であること、原稿は正確だったが、印刷、校正で間違つたことのお詫びとともに、世界の山岳会で「百年史」を出版しているのは、イタリアと日本だけであるなどの「こぼれ話」があり、閑談は3時間におよんだ。閑談会終了後、何人かの会員が「今日の閑談会は久しぶりに盛り上がつてよかった」と語っていたので、世話役の2人にお伝えし、今回のご苦勞への感謝の言葉にかえた。

(関塚貞亨)

快適なフライトでアフリカ最高峰に挑む

ヨーロッパ経由 **KLMで行く。** **【山麓乗り入れ】** 東京・大阪発着

キリマンジャロゆったり登頂とサファリ11日間

ホロンボハット(3,720m)に2連泊

●9/14(金) ●9/27(木)発

628,000円〈ツアーリーダー同行〉

ALPINE ツアーズ サービス 株式会社

〒105-0003 東京都港区西新橋2-8-11 第7東洋海事ビル4階 ☎03-3503-1911
大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557
e-mail: info@alpine-tour.com http://www.alpine-tour.com

支部

だより

秋田支部

『びんだれ(鬘垂)山』を楽しむ

4月28日、会員諸兄の精進よろしく、初夏を思わせるような快適な登山日和だ。

標高も343^{メートル}となんとなく語呂がいいが、国土地理院の地図には載っていない、登山口などの案内標識がない、藪をかき分けなければならぬ、見晴らしはピークまで待たなければならぬ等々。企画した佐藤博委員は懐かしの歌謡曲に歌われている「ご当地ソング・びんだれ山」の舞台を見せてくれたのだった。

登山口とされる地点に別荘があり、オーナーに駐車の手可を得たと9時15分出発。小沢を歩き、薄い踏み跡程度の道をひたすら登るのだが、晴天の上に見通しがよいので一行和気あいあい、駄洒落も飛び出す余裕ぶり。薄い藪をこ

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとリポートします。

いで、アツという間に山頂。眺めはさすがにいい。ここを「前ビンダレ山」とした。

今日の日のために「ビンダレ山」の歌を練習したという小笠原会員が、朗々と披露してくれた。地元出身歌手の故郷を偲び、母を慕うこの歌は「ふるさと演歌」として親しまれ、歌い継がれている。記念写真を撮ったあと、今度は「中ビンダレ山」に向かう。しばらく稜線に沿った藪をこいでほどなく頂上。さらに10分程進んで「奥ビンダレ山」。大杉があり、樹間から角館奥の山谷薬師や阿仁の大仏岳などが望めた。

ここで、懐メロ「ビンダレ山」の大合唱。親しみがあつてなかなかいい歌だ。10分程で下山開始。「前ビンダレ山」から尾根上の藪を駐車地点を目指して下山した。駐車地点のすぐ近くにある、県指定天然記念物「ビンダレ枝垂栗」



頂上では懐メロ「ビンダレ山」の大合唱となった

の下で昼食会、ちょうど正午だった。アルコールで気炎をあげる御仁もいて、和やかで賑やかな至福のひとつきだった。(鈴木要三)

昼食後、同じ協和町宇津野にある県の天然記念物、県内最古の「しだれ桜」を見学。花はすでに終えていたが、老桜はドッシリと風格を備えた見事さであった。

さらに土川地区にある「ばっこ杉」に向かう。ばっこ杉は樹高37^{メートル}、根回り10・5^{メートル}、樹齢推定300年といわれ、県内でも珍しい杉の大木、おとな8人が手を繋いでやっとひと回りという巨木であった。

この日、2つ目の山は「新奥の細道」羽州街道を歩き、高寺観世音の鎮座する高寺山(170^{メートル})であった。

国道13号線沿いの前沢登山口から登り、杉や枯れた赤松の太木などの混在した参道を登りきると、山門があり、木馬が三頭左右に奉納安置されていた。山門を潜り神社に参拝し、安全祈願をした。神社の裏手から鬱蒼とした杉林を見上げながら雑木林を登って頂上に着く。頂上には「高寺山観音堂跡」の石碑が杉やカエデ等の林の中に鎮座していた。

記念撮影後、下山開始。表参道の急坂を下り、見応えのある杉並木を通り過ぎると展望台があり、眼下には仙北平野を悠然と雄物川が横たわり、まぶしく流れていた。春霞のため、鳥海山麓の残雪はかすかに望めたが、その雄姿を見ることはできなかった。

混在する木々の新芽を出したばかりの中を良い天気恵まれ、歩きやすい参道を下った。間もなく国道13号線沿いの表登山口に着く。ここには高善寺と馬頭観音がある。前沢登山口には16時に戻った。登山口にある湧水、明治天皇行啓の

際にお茶の水として供したという清水で喉を潤してから解散した。

(高橋忠雄)

東海支部

「森林力養成講習会」(猿投の森づくりの会)に参加して

東海支部の「猿投の森づくりの会」主催の森林力養成講習会が4月14、15日に開催された。東海支部とは「森の勉強会」を通じて森林について学んできたが、カワウの糞害で枯死した森の再生を近江八幡市の伊崎半島で、ヒマラヤングリーンクラブの一員として行なっているの、森づくりの知識をさらに蓄積するために参加した。有益な講習会であった。

「猿投の森の植生と遷移」というテーマで川合壽之氏が話をされた。猿投山の経緯、陶器製造の燃料供給のため禿山になり、洪水が頻発、治山治水に100年かけ、自然の植生は再生しているが、山は放置され林床には光も入らない森林となった。どういう樹林相が良いかは人間が判断するという方針のもと、明るくレクリエーション活動にも向いている、活性の高い豊かな森を造るために、種々の調査をしながら、施業を行なっていると事である。そして広葉樹が8割、人工林が2割という施業地を案内してもらった。特に印象に残ったのは、尾根筋に山桜の太木が21本あったが若木がなかったこと。また間伐材を利用してシイタケ栽培や木工品(ダックスフンド、鹿等)を作っていたことだ。

次に鋸谷茂氏が「広葉樹林の森」「人工林の間伐と混交林への誘導」というテーマで話をされた。健全な山とはをテーマに、遷移のこと(お花畑、里山、人工管理)、表土流出(照葉樹林、伐採、スギ林、ヒノキ林)と土砂崩壊(地層と水)等、および山の密度管理の考え方について話をされた。

振り出し式の4本の釣り竿を用いて行なう(胸高直径と本数の算定表)。形状比(樹高/胸高直径)70未満の人工林では、胸高断面面積合計が50平方メートルから30〜35平方メートルの間を維持して密度管理を行なう。30〜35平方メートル以下になると、中層木が上層木と交替して別な森になってしまう。形状比80未満の林は、伐り倒し間伐を行なう。85以上の線香林は巻き枯らし間伐がよい。

そして間伐材選定の説明通り、実際に7班に分かれて胸高直径を測り、4本の釣り竿を用いて間伐材を選定し、うち3班は各1本ずつ伐倒、2本がかり木になった。他方、畠山芳雄氏からはチェンソーと刈払機の扱い方、切り方の基本(玉切り、伐倒、安全作業について、および用具の手入れ、目立て等の注意事項についての説明と、実演をして見せてもらった後、各班に分かれ全員実習を行なった。

初めての者にとつては貴重な経験になったと思う。また、かかり

木の処理の仕方についても実演を見てもらった。かかり木の処理の危険さをもよく理解できたことと思う。このような実習は回を重ねて慣れることが大切であると思う。山桜の太木が残っている尾根は今後どのように保存されるのか。伐倒した間伐材はどう利用していくのか。「猿投の森」がこれからのように変化していくのか楽しみである。

「猿投の森づくりの会」会員の心づくしの温かいどんの接待と権茸の樽木やダックスフンドのお土産に感謝である。(酒井展弘)

最新刊

——リーダーの必読書——

北アルプス

大日岳の事故と事件

斉藤惇生 編/A5判/190頁/1995円

山の事故は事件になるのか。ふたりのわかい命をうばった北アルプス大日岳の雪庇崩落はどうしておきたのか。事故がなぜ事件になったのか。有為の少壮弁護士が核心にせまる。雪氷学研究的權威は、巨大雪庇の構造を世界にさがけてあきらかにした。本書はリーダーたるものの必読書である。

(国立民族学博物館顧問 日本山岳会名誉会員 梅棹忠夫)

最新刊

——樹林の山旅が楽しめる奥美濃——

三訂 奥 美 濃

——ヤブ山登山のすずめ——

高木泰夫 著/四六判/244頁/1890円

最新の情報に地図と写真を掲載した奥美濃70山のガイド。

——五百澤智也山岳図集——

山と氷河の図譜

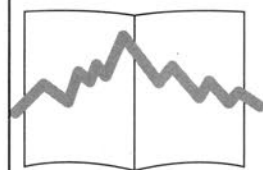
五百澤智也 著/B5判/144頁/2940円

カラー63点、2色刷33点、モノクロ33点、計129点の作品を掲載

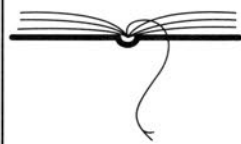
〒606-8161京都市左京区 一乗寺木ノ本町15

ナカニシヤ出版 Tel. 075-723-0111 Fax. 075-723-0095

http://www.nakanishiya.co.jp/ [表示価格は税込]



図書紹介



『登山家高木正孝—その人生とアルピニズム—』 円満字正和・著



2007年3月
ボイジャー社理想書店刊
B6判 384頁
頒価 3015円(送料込)

岩波書店『パタゴニア探検記』は戦後登山文学の傑作として、世代を超えて40年近く読み継がれてきた。その著者・高木正孝とはいかなる人物か――。

高木は1913年、祖父を慈恵医大の創設者とする家系に生を得る。成蹊高校時代から谷川岳岩壁登攀で活躍。東大を経てベルリン大学に留学。戦時下のドイツ、スイスで氷河技術を学び、本場のアルピニズムを習得する。戦後帰国し、気鋭の心理学者と

して神戸大学に赴任する。

戦後の国家的壮挙であった日本山岳会のマナスル登山では、先遣隊として中心的役割を果たした。

神戸大学では若い山岳部員の育成に努め、その成果は1958年、日本チリ合同パタゴニア探検隊アレナレス峰初登頂として結実する。

本書の著者は当時29歳で、参謀役としてパタゴニア探検に参加し、高木と6カ月間行動を共にした。

チリ隊員との心理的な葛藤、猛烈な蚊との悪戦苦闘、氷河上の困難なルート探索など、本書では『パタゴニア探検記』とは違った視点で高木の躍動する姿が生々しく綴られている。

高木の死はまったく予期しない場所、南太平洋上で起こる。マルケサス諸島で学術調査中の高木は、1962年8月6日、突如としてスクーター船上から姿を消すのである。著者は八方手を尽くして失

踪の原因に迫ろうとするが、謎は深まるばかり。

高木の49年の生涯は波瀾に満ちみち、まことに並々ならぬものがあつた。

旧友・田口二郎は、高木を評している。

「ある社交パーティーで、ディナージャケットを着こんでくつろいでいるチャカ(高木の愛称)を見てそれを自然と思うし、その翌朝、同じ本人が橋の下で浮浪人と枕を並べているのを見ても不思議とは思わない。そういう男だったよ」

高木は孤高の放浪者の一面をもつていた。高木の生涯は、二十世紀を生きた高貴で魅力ある行動者、思索者の一典型として普遍性をもっている。

本書はアルピニズム論としても、人間論としても興味の尽きない評伝となっている。

*問い合わせ先はボイジャー社

(TEL 03-5467-4646)

*注文先はコンテンツワークス (TEL 1020-298-956)

(岡市敏治)

『感謝されない医者—ある凍傷Dr.のモノローグ—』 金田正樹・著



2007年3月
山と溪谷社刊
四六判 245頁
定価 1680円

800人以上の凍傷患者を診てきた医師のモノローグである。完治して当たり前、指などを切断せざるを得なかった重症患者にはほとんど感謝してもらえない、損な役回りを一手に引き受け治療を続けている医者が、その体験を綴る。凍傷を防ぐにはどのようにしたらよいのか、雪山、冬山に入る登山者には必読の書である。

第Ⅱ次RCCエベレスト登山隊で加藤保男の凍傷治療を行なうが、治療について確たる文献もなく、試行錯誤した様子が伺える。その後の経験から、凍傷に無知な医師の治療や投薬、患者の素人療法で凍傷患部をより悪化させた具体例を述べている。

剣沢SOSには、夜間の鋸岳救援登山や救助事例にまつわるエピソードが綴られ、医師としての責

任感が感じられる。

また、アフガニスタンでの医師としての活動も綴られている。01年、アメリカが進撃し、内戦状態になってから医療団の一員として再渡航。そこにトラックで運び込まれた42人の患者を、同僚の医師と2人で、翌日昼までに、手術や足の切断を行なった凄惨な野戦病院の地獄状態を描写。3カ月の勤務で700例の手術・切断を行なった。そこで、「何が正義の戦いだ。戦争が明るい未来を開いたことはない」と痛感する。

登山や冒険に対する情熱と人間性から忘れえぬ患者として、加藤保男、吉野寛、中島俊弥、木本哲、大場満郎、山野井泰史の6人との出会いや、凍傷治療の経過と彼らの心理状態が描かれていて興味深い。

また、凍傷を起こすメカニズム、高所における凍傷、凍傷の程度と症状、凍傷の経過などを解説し、凍傷は予防できるか、多数の写真や事例を列挙して言及する。登山者だけでなく一般の医師にも理解してほしい凍傷治療のバイブルと言えよう。

最後に、「長い間、数多くの凍傷

例を診たが、山岳界の変化も見た。登山にルールはあってもルールブックに載っていない。凍傷のリスクを少なくするには、体力作りと技術、知識、そして自然への謙虚さを忘れてはいけない」と結んでいる。

(南井英弘)

加藤好美・編

『First Flush——パンバリ・ヒマール遠征隊2006』



2006年12月
日本山岳会 学生部
B5判 118頁
定価 2000円

パンバリ・ヒマール遠征隊の報告書である。

日本山岳会100周年事業として行なわれた学生部のヒマラヤ登山は、04年のムスタン遠征に続いて2回目となる。学生部の遠征については原則があり、それに沿って目標とすべき山の選定が行なわれている。その結果、パンバリ・ヒマールが選ばれた。

報告書の「はじめに」で隊長が「私たちの『学生』の味をだしたオリジナリティーあるものにしまし

た。飾らず、包み隠さず、全てをさらけ出し、思ったこと、感じたことを素直に書いています。登山に向けての準備から帰国まで、その場の臨場感が感じ取れると思います」と書いている。この意図は十分に成功していると感じられる。

また「出発までの道のり」の中で、各隊員の意気込みが記されている。巻末で、帰国後の隊員のエッセイが記されているので、対比して読まれれば隊員各自の成長が見られるというのは失礼かもしれないが、何かが変わっているのが感じられる。

図書紹介とはすこし外れるが、吉永英明理事が「学生部の遠征を終えて」の終わりに「今後もこうした学生たちによる海外遠征を継続して支援していきたいと思っている……学生たちに夢を抱いてもいい、山岳部活性化に少しでも役立つな」と思っているが、学生部のみならず、山岳会全体の正夢にしたい気持ちである。

登山は報告書の作成ではじめて完成ということからいえば、帰国後1カ月半で発行されたことは素晴らしいことである。(茂見猛)

図書受入報告 (2007年7月)

著 者	書 名	ページ・サイズ	出版元	刊行年	寄贈／購入別
岩村和彦	Ganさんが遡行 北海道沢登り三昧	238pp/21cm	共同文化社	2007	出版社寄贈
菊地敏之	ハイグレード登山技術——アルプス3000m峰から冬山まで	176pp/21cm	東京新聞出版局	2007	出版社寄贈
山口耀久・他(編)	アルプ——特集 串田孫一	349pp/22cm	山と溪谷社	2007	出版社寄贈
清水敏一	山岳画家 加藤洵綾——歌と旅の人生	297pp/23cm	日本山書の会	2007	発行者寄贈
溝手康史	登山の法律学	359pp/19cm	東京新聞出版局	2007	出版社寄贈
不来方峻	山岳歌集 アルプス交響楽	222pp/20cm	短歌研究社	2007	著者寄贈
工藤隆雄	山小屋の主人の知恵袋	237pp/19cm	東京新聞出版局	2007	出版社寄贈
イヴォン・シュイナード	社員をサーフィンに行かせよう——パタゴニア創業者の経営論	333pp/20cm	東洋経済新報社	2007	出版社寄贈
Guido Rey	Opere Complete (Vol.1) Il Monte Cervino	348pp/27cm	Andrea Viglioni e c. Editori	1962	近藤等氏寄贈
Guido Rey	Opere Complete (Vol.2) Alpinismo Acrobatico	240pp/27cm	Collezione Montes	1953	近藤等氏寄贈
Guido Rey	Opere Complete (Vol.3) Il Tempo Che Torna	347pp/27cm	Collezione Montes	1954	近藤等氏寄贈
Guido Rey	Opere Complete (Vol.4) Alba Alpina	303pp/27cm	Collezione Montes	1954	近藤等氏寄贈

会務報告

平成19年度4回(7月度)理事会

日時 19年度7月11日 18時30分
～20時40分

場所 日本山岳会会議室

【出席者】宮下会長、鰐坂・神崎各副会長、吉永・宮崎・成川・斎藤・藤井・石橋・古野・太田・堀井・相馬・山川・岡部各理事、深川・竹中各監事、近藤常任評議員
【欠席】日下田・河野各常任評議員
会長挨拶 石橋理事、深川・竹中両監事に事務局の職務分析をお願いし、先般、常務理事会に中間報告をいただいたので、それをもとに総務・財務常務理事で検討することとした。今日の議事進行は、神崎副会長にお願いする。

【審議事項】

1・宮崎支部第10回子供登山教室への助成金
助成金3万2000円。今後、

同様の申請が出た場合は財政状況を勘案し慎重に取り扱う。(承認)

2・「茨城支部」新支部長の承認
支部長：星埜由尚(No.1398)

3・「千葉支部」新支部長の承認
支部長：篠崎仁(No.7343)

4・「広報委員会」の委員選任
委員長：鰐坂青青、委員：成川隆顕、神長幹雄

5・「公益法人化プロジェクト」委員の選任
委員：村木潤次郎、竹内哲夫、河野長、藤本慶光、佐野忠則、宮下秀樹会長、鰐坂青青・神崎忠男両副会長、吉永英明常務理事(事務局)

6・事業委員会の名称を集合委員会に変更する(承認)

7・名義後援申請：「地図展2007 in 富山」

主催：国土交通省国土地理院、

期間：平成19年10月18日～平成19年10月21日、場所：富山県民会館(承認)

【報告事項】

1・土曜懇話会報告(神崎副会長)

6月16日(土)開催。講師は 田辺治会員。「ローツエ南壁冬季登攀完登までの足跡」。出席者21名。今後の土曜懇話会は、集合委員会(事業委員会)に引き継ぎ、内容を検討したうえで継続したい。

2・茨城支部、千葉支部設立総会報告(宮下会長)

茨城支部は6月15日(金)、千葉支部は6月24日(日)に開催され、新支部として発足した。支部にも多様な人達のいることが認識でき、活性化が期待できると感じた。

3・マッキンリー気象観測事業の位置づけについて(宮下会長)

科学委員会管理下の事業として再確認し、補助金等の管理報告を管轄する。

4・文部科学省へ事業報告書の提出(宮崎常務理事)

6月25日、スポーツ・青少年局競技スポーツ課に決算報告書及び役員変更届を宮崎・吉永両常務理事で提出。

5・牧野衛名誉会員(静岡支部)逝去(宮崎常務理事)

6月21日逝去、100歳。

6・2007年度収支中間報告(第一・四半期)及び100周年記念事業収支中間報告(吉永常務理事)

7・(社)日本山岳協会、新役員挨拶の披露(神崎副会長)

会長：田中文男氏、他。

8・会報『山』の編集報告(神長)

2007年の編集方針の説明：①高齢化など山岳会の諸問題の掘り下げ、②支部、委員会などのより詳しい活動報告、③山岳書の普及、啓蒙。



ATLAS TREK

個人手配旅行から人気のトレックツアーやエクスペディションのアレンジまで。充実度が違う「旅」のプランニングをここが得意です。山旅などあらゆるジャンルを取り扱っています。お気軽にご連絡ください。

株式会社 **アトラストレック**
(国土交通大臣登録旅行業1167号)

東京/〒160-0008 東京都新宿区三栄町25 三栄ハウス202 TEL 03-3341-0030
大阪/〒540-0012 大阪市中央区谷町3-4-5 中央谷町ビル501号 TEL 06-6946-9111
名古屋/〒464-0807 名古屋区千種区東山通り5-113 オークラビル6F TEL 052-788-2422

9・支部化促進委員会の取り扱いについて(宮下会長)

解散の方向で考え、新たな支部設立の要請があった場合、支部担当副会長が特別委員会を設置するなどして対応していきたい。

10・7月度入会12名、復活2名

ルーム日誌 7月

2日 総務委員会

3日 図書委員会 アルパインス
ケッチクラブ

4日 常務理事会 山岳地理クラブ
101会

5日 自然保護委員会 九五会

9日 アルパインスキークラブ

10日 二火会 アルパインスケッチ
クラブ

11日 理事会 山想倶楽部

12日 事業委員会 フォトビデオ
クラブ 山の自然学研究
会

会

13日 千葉支部 プモリ研究会

14日 広報委員会

17日 資料映像委員会 インター

ネット小委員会

18日 事業委員会 三水会 つく
も会

19日 科学委員会 三水会 緑爽

会

20日 同好会・同期会連絡会議

21日 山岳編集委員会 三水会

23日 総務委員会

24日 00会

25日 自然保護委員会 麗山会

26日 新土曜会 山遊会

27日 青年部

31日 アルパインスキークラブ

7月来室者528名

会員異動(7月)

物故

近藤寿行 (10917) 07・7・8

宮津公一 (13323) 07・7・26

遠藤登 (6122) 07・7・30

退会

土居清 (7723) 岩手

木村智彦 (13611) 秋田

終身会員

小栗宏 (6213)



I N F
O R M

インフォメーション

A T I
O N

◆白神山地ブナ林再生事業

青森支部

世界遺産白神山地のバッファゾーンの周辺で生育不良杉林地をブナ林に再生するため、除伐や植樹などを行なう。寝袋、食器必携。できればテントも各自で用意。青森空港送迎は要相談。

日程 9月22日(土)～24日(月)

集合 22日8時 JR弘前駅城東口、および10時30分 奥赤

石林道ゲート

解散 24日15時 奥赤石林道ゲート

費用 食費1食500円(現地で徴収)

定員 50名

申込 9月12日までにハガキかメールで須々田秀美あて

(〒036-0103 平川市本町北柳田)

96-2

✉susuta@jun.rikadai.jp)

◆森のフェスティバル

東海支部「猿投の森づくりの会」

日時 10月6日(土)

(雨天のときは10月20日(土)に順延)

内容

午前はフルオーケストラによる演奏、午後は森の観察会または自由行動でハイキングなど

費用 交通費300円(シャトルバスの一部負担)

申込 9月20日締め切り

往復ハガキで申し込む(往復ハガキ以外の申込不可)

〒460-0014名古屋市中区富士見町8-8 OMCビルB

1F 日本山岳会東海支部「森のフェスティバル」

係

*申込者に詳細を送ります。

◆第36回山岳史懇談会

図書委員会

独自の登山活動によって数々の

遠征記録に輝く日本山岳会東海支部の歩みを語っていただきます。

テーマ「東海支部の山登り」

語り手 寺西申生会員

尾上昇会員

日時 9月27日(木)18時30分より

場所 山岳会104号室

問合 平井吉夫(TEL 03-33388-5140)

*参加申込み・参加費不要

◆紅葉山行「燧ヶ岳・会津駒ヶ岳」

集雲委員会

檜枝岐温泉に泊まり、錦秋の山を2山満喫します。

日時 10月14日(日)～16日(火)

宿泊 民宿「吉田屋」

費用 2万円(宿泊・現地交通費・保険料・通信費他)

定員 15名

申込 9月15日までに山崎浩子まで (FAX 045-782-8712)

✉y-hiro@fa3.so-net.ne.jp)

*現地集合、現地解散です

*申込者に詳細を送ります

◆2007自然保護全国集会

自然保護委員会

日時 11月17日(土)～18日(日)

場所 富士五湖(宿泊「レイクホテル西湖」前夜泊可)

費用 ①2泊2万円

②1泊1万2500円

日程・第1日(9時開会) 支部報告、グループ討議(高山植

物、山のトイレ、登山道、適正利用)、シンポジウム、懇親会

●第2日

フィールドスタディ(十二ヶ岳、竜ヶ岳、三ツ峠)

申込 9月25日までに、費用①②・グループ討議・フィールド

スタディの希望を明記し、川越尚子まで (〒185-0011 国分寺市本多3-7-31 FAX 042-3321-6059)

✉kawagoejac@mti.biglobe.ne.jp)

*申込者に詳細を送ります

◆オーストラリア最高峰、コジウスコ登山

集雲委員会

スレドボ3連泊で登頂とトレッキングを楽しみます。

日時 08年1月10日～17日

費用 31万円位(空港税等含む)

定員 15名

申込 三井吉由江まで (FAX 03-3451-5388)

✉mtsun@cyberoz.net)

◆第15回山岳写真展「心に映る山々」 アルバインフォトクラブ

●さんけん通信●

山研いよいよ夏本番！

山研管理人 内野かおり

昨年の7月豪雨のことが頭にあって、今年の梅雨は憂鬱でした。豪雨の後から水源の善六沢はちょっとした雨でも濁りやすくなり、また取水口が土砂で埋まることも多くなりました。今年も、大雨が降ったらどうしよう、水のことで利用客に不便な思いをさせることになったらどうしよう、と心配な毎日を過ごしました。

海の日連休が、7月にしては珍しい台風接近と重なり、戦々恐々としていたのですが、実際にはたいした影響がなく、拍子抜けでした。直前まで、山研に来るか来ないか迷っていた方も、人の少ない上高地を満喫できたと、喜んで帰られました。ちなみに、上高地への道路は、1時間に20ミリ、もしくは降り始めから連続80ミリの雨量を観測した時、通行止めになります。例年1、2度、そんな日がありますが、今年は1度もなく8月を迎えました。

台風も過ぎ去りホッとしていた連休最終日、中越沖地震が起きました。娘と管理人室にいたのですが、

うん？と思ったら、ガタガタと床が動きました。上高地で体験した2度目の地震です。3年前、たまたま管理人の引き継ぎのために来ていた日に起きた中越地震と同じくらいの揺れ方だな、と感じました。山研の中ではロッキングチェアがユラリユラリと揺れ、ストーブの中の灯油が、チャップンチャップンと音を立てていました。長野の北部でも震度6を記録しました。上高地＝長野、という印象が強いせいか、上高地界限にもキャンセルがあったようです。実際には「歩いていた気がつかなかった」という人もいる程度の揺れでした。そうこうしているうちに無事梅雨もあけ、今年の山研はホッとひと安心で夏本番を迎えました。

昨年7月に山研で支部長会議があり、全国からお出かけいただきました。その影響か、今年は地方の支部の方々の利用が増えています。こうして全国に知り合いが増え、なじみが深くなると、ニュースで地方のことが話題にあがった時に、お名前や顔が浮かぶようになりました。そんな方の中にも今年、九州南部の大雨や中越沖地震の被害に遭われた方がいらっしゃるかもしれません。通常の生活に戻って、また上高地の自然を楽しむにいらっしゃる日が一日も早く来るようにと願うばかりです。

山の写真好きの同好会です。国内外の山岳写真約50点を展示。
日時 9月26日(水)～10月8日(月)
(10～18時、月曜休館。ただし8日は祝日のため開館し、最終日なので17時まで)

会場 ポートレートギャラリー
(日本写真会館5階 TEL 03-3351-3002)

*入場無料

◆会津の山(第3回) 二火会

地元の江花会員が同行。往復、マイクロボス利用。

日時 10月15日(月)～16日(火)

場所 高旗山と明神ヶ岳

集合 JR三鷹駅北口

定員 18名

費用 2万5000円(宿泊、バス代等)

問合 金井一子まで TEL 03-3714-7388

✉ ichiko_k@tdion.ne.jp

◆岩橋崇至・待望の新作写真展「ロックガーデン」

アメリカ中西部に広がる砂漠地帯、ダイナミックかつ繊細な造形美。日本人初撮影の奇勝地も紹介。

会期 9月29日(金)～10月29日(月)

(10時～17時30分、日曜・祝

日は休館)
会場 キヤノンギャラリーS(港区港南2-16-6 キヤノンスタワー1階)

問合 TEL 03-6719-9021

◆編集後記◆

●暑い夏になりましたが、8月5日の日曜日、富士山で行なわれたゴミ拾いに参加してきました。夏の富士山はそれこそ十何年ぶりでしたが、そのにぎわいには驚いてしまいました。20代から30代の若い人たちが多く、特に女性の姿が目立ちました。「富士山だから登る」のでしょうか、なんとか「次の山」へつながってくれば……。それができれば、登山界にも日本山岳会にも未来があるように思いました。(神長幹雄)

日本山岳会会報 山 747号

2007年(平成19年)8月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

発行者 日本山岳会会長 宮下秀樹

編集人 神長幹雄

Eメール jac-kaiho@jac.or.jp

印刷 株式会社 双陽社